

「ベタニヤの奇蹟」

ヨハネの福音書 11:1~45

死んで四日もたった人が生き返るといふ、「ベタニヤの奇蹟」。ここに隠された様々なしるし、「型」をヘブ
ル語的視点、神様のご計画の視点で考えてみたいと思います。

1. 栄光

11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタ
ニヤの人であった。

11:2 このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をめぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病
んでいたのである。

11:3 そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛して
おられる者が病気です。」

11:4 イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのも
のです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

まずこのベタニヤの奇蹟、死んだラザロが生き返る出来事が指し示すものは「神の栄光のため」のものであ
るといふこと、そして神様が栄光をお受けになることによって、「神の子」もまた栄光を受けることを表すも
のであることが語られています。このヨハネの福音書に描かれているイエシュアの姿勢、基本となるイエシュ
ア像は、父である神様から遣わされ、神様の栄光のために存在し、働くことだと考えられます。その結果とし
て御子であるイエシュアもまた栄光を受ける、それが神様の計画が完成することによって果たされる目的であ
ると考えられます。そしてここで使われている「栄光」は、ヘブル語でカーヴォード(תִּירוֹד)ですが、この言
葉が聖書で初めて使われる出来事が創世記 31:1 にあります。

創世記

31:1 さてヤコブはラバンの息子たちが、「ヤコブはわれわれの父の物をみな取った。父の物でこのすべての
富をものにしたのだ」と言っているのを聞いた。

ここで「富」と訳されているのがカーヴォードです。これはアブラハムの子、イサクの子ヤコブが、その母の
兄であるラバンのもとに身を寄せていた時の出来事ですが、ヤコブは神様の祝福により多くの家畜を得ました。
それを妬んだラバンの息子たちが言った言葉ですが、彼らの言い分がこれです。「父の物ですべての富、カー
ヴォードを得た」です。重要なのはこのカーヴォードはもともと父のものであったということです。それをヤ
コブは受けたのです。ラバンはヤコブの妻、レアとラケルの父ですので、ラバンとヤコブは「義理の…」では
ありませんが、父と息子の関係でもあります。つまり初め父に与えられたカーヴォード、栄光が子に与えられる、
それが栄光、カーヴォードに込められた意味、概念です。つまりこのベタニヤで起こった奇蹟は、人が御子で
あるイエシュアに与える栄光ではなく、御父である神様を通して、御子であるイエシュアに与える栄光のため
の奇蹟、しるしであると考えられます。

2. ベタニヤ

そしてその舞台として選ばれたのが、このベタニヤ(בֵּיתַנְיָ)という名の村です。この名前に二つの言葉を見つけることができます。一つはバイト(בַּיִת)「家、国」を意味する言葉です。そしてもう一つはアーニー(אֲנִי)「貧しい、哀れな、へりくだった」という意味の形容詞で、アーナー(אָנָּה)「悩む、苦しむ」という意味の動詞からできた言葉です。このアーナーが聖書で最初に使われるのが創世記 15:13 です。

創世記

15:13 そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。

15:14 しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。

これはアブラハムの子孫であるイスラエルの民が、モーセによってエジプトの奴隷の苦しみ、アーナーから解放され、脱出することを予言した神様の御言葉です。この出エジプトの出来事こそが、イスラエルが神様の選びの民としての象徴です。しかしこれもまた型にすぎません。真の出エジプトは、モーセではなくメシアであるイエシュアによってイスラエルの民が助け出されることです。それこそが神様のバイト、すなわち御国を建て上げることであるという意味が、このベタニヤという名前には込められていると考えられます。

3. マルタとマリヤ

11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

マルタ(מַרְתָּא)とその姉妹、すなわちマリヤ(מַרְיָם)、この二人の名前に共通する言葉があります。それはマル(מַר)「苦い、激しい、苦み、苦しみ」を意味する形容詞、また名詞です。マルはマーラル(מַרְלַר)「苦しめる、激しく泣く」という意味の動詞からできています。このマルが初めて使われる箇所が創世記 27:34 です。

創世記

27:34 エサウは父のことばを聞くと、大声で泣き叫び、ひどく痛み悲しんで父に言った。「私を、お父さん、私も祝福してください。」

これは長子の祝福をヤコブに奪われ、マル、痛み悲しむエサウの姿です。その痛み悲しみから発せられる言葉は「お父さん、私も祝福してください」です。エサウは後のエドム人の祖、つまり異邦人です。この姿は、神様のご計画の視点で捉えるならば、御父である神様に「私も、ヤコブすなわちイスラエルだけでなく、私をも祝福してください」と切実に訴える異邦人の姿が表されていると考えられます。異邦人と言ってもすべての異邦人ではなく、イスラエルを祝福する御父である神様を呼び求める異邦人です。つまり「マルタとその姉妹」とは、イスラエルの神様を信じる異邦人の教会、クリスチャンを指し示していると考えられます。

4. ラザロ

そう捉えるならば、ラザロは当然イスラエル、ユダヤ人を指していると考えられます。ラザロという名前はヘブル語ではこのように表記され(רַזְאוּלָא)、旧約聖書ではエルアザルと訳されています。エルアザルとはエル(אל)「神」とアーザル(רַזַּא)「助ける」が合わさった言葉で、「神は助ける、主は我が助け」という意味があります。このアーザルが初めて聖書で使われる箇所が創世記 49 章にあります。

創世記

49:22 ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの実を結ぶ若枝、その枝は垣を越える。

49:23 弓を射る者は彼を激しく攻め、彼を射て、悩ました。

49:24 しかし、彼の弓はたるむことなく、彼の腕はすばやい。これはヤコブの全能者の手により、それはイスラエルの岩なる牧者による。

49:25 あなたを助けようとするあなたの父の神により、また、あなたを祝福しようとする全能者によって。その祝福は上よりの天の祝福、下に横たわる大いなる水の祝福、乳房と胎の祝福。

49:26 あなたの父の祝福は、私の親たちの祝福にまさり、永遠の丘のきわみにまで及ぶ。これらがヨセフのかしらの上にあり、その兄弟たちから選び出された者の頭上にあるように。

これはイスラエルの長子となったヨセフに語られた預言です。彼はマーラル(מרר)悩まされますが、「イスラエルの岩なる牧者」すなわちイエシュアによってアーザル、助けられることが預言されています。つまりラザロ、エルアザルには「イエシュアはイスラエルを助け出し、選ばれた者として祝福する」という意味が隠されていると考えられます。

このように、マルタとその姉妹を異邦人の教会、そしてラザロをイスラエル、ユダヤ人として捉え、ここに表されている奇蹟の意味を探ってみたいと思います。

11:6 そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。

イエシュアは先ほどのヨハネ 11:4 で「この病は死で終わるだけでなく」と語っておられます。つまり死ぬけれども、それで終わりではないということであり、ラザロが一旦死ぬことが想定、決定されています。ラザロがイスラエルを表していると述べました。旧約聖書に記された歴史の中で、イスラエルは栄枯盛衰を繰り返しましたが A.D70 年、イスラエルは完全に滅亡し、国は失われました。しかし 1948 年、イスラエルは再び建国され、今日に至ります。この事実は 20 世紀最大の奇蹟として世界の歴史に記録されていますが、現在のイスラエルは、多くの者がイエシュアを知らず、また信じず、神様のご計画の完成からはまだまだ程遠い状態です。周辺の中東諸国とは、いさかいが絶えず、内紛もしばしばです。なぜならそれは、キリスト、メシアであるイエシュアがまだ来られていないからです。つまりイエシュアは「なお二日とどまって」おられるのです。

II ペテロ

3:8 主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。

この御言葉を文字通りに一日を千年として捉えるならば、二日は二千年です。現在は A.D2016 年、つまりイエシュアがこの地上にお生まれになって 2016 年（もちろんこの数字の正確性には疑問がありますが）、33 年の生涯を歩まれ、十字架にかかれ、死んで三日目に復活され、後に天に上られ、御使いによって再臨が予告されてからまもなく二千年が経とうとしているのです。イエシュアが来られる時を正確に知ることはできませんが、その時はもうすぐそこまで来ていると考えるべきです。

使徒

1:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。

1:11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、**またおいでになります。**」

5. もう一度

11:7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。

11:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」

「もう一度行く」イエシュアはもう一度、つまり二度来られる方です。一度目は「ユダヤ人たち」によって殺されるため、すなわち十字架にかかれるためにです。そして二度目はラザロを生き返らせる、つまりイスラエル王国を再興し、神の国、御国をこの地に建て上げるためであり、イエシュアの「再臨」されることが示されていると考えられます。

6. 分ける

11:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。

11:10 しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにはないからです。」

イエシュアは天地創造において光を昼と呼び、やみを夜とされ、そしてそれまで混沌としていたこの二つを、はっきりと区別されました。

創世記

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを**区別**された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

神様の御業、ご計画を一言で表すとすればそれは「分ける」です。なぜならそれを「第一」になされたから、「第一とされた」からです。今という時間を生きている私たち人間は、時間という概念に縛られているので、

どうしても「昼の次は夜、そしてまた昼が来る」というような捉え方で物事を考えますが、神様のなされたこと、そしてこれからは光とやみを「分ける」ことではないかと思われます。それは「さばく」とも言い換えることができます。この捉え方でこのイエシュアの言われた言葉の意味を考えるならば、「昼」とは世の光であるイエシュアを見る、つまりともに生きる世界、すなわち神の国、御国を指し、「夜」はやみ、つまり倒れる、イエシュアのいない世界、すなわち滅びを意味すると考えられます。そして「昼間は十二時間ある」とは岩波訳では、「十二時間が昼に属しているではないか」と訳されています。光に属する「十二」の時、「十二」という数字は、聖書において神の選び、所有、支配を意味する数字です。つまり「イエシュアとともに十二の者が神の国、御国に入る」ことを意味すると考えられます。そしてこの「十二の者」とは、イエシュアの十二弟子をかしらとするイスラエルの十二部族を指し示していると考えられます。

マタイ

19:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」

つまりイエシュアはこの昼と夜のたとえの中に「世が改まって人の子がその栄光の座に着く時」すなわち神の国、御国が完成することを語られたのだと思われます。ここに異邦人のことが入れられていませんが、この昼と夜のたとえは、「弟子たちに対して」語られたものであるからだと考えられます。

7. 再臨

11:11 イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」

11:12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」

11:13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。

11:14 そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。」

11:15 わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

初臨のイエシュアは、夜番をしていた羊飼いたちが目撃した天の軍勢の啓示のもとで、赤ん坊の姿で来られましたが、「もう一度」、再臨のイエシュアは、死んだラザロを、すなわち滅びたイスラエルを再興させるメシアとして、聖徒たちとともに来られます。

黙示録

19:13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

19:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。

これは再臨のイエシュアに関する黙示録の預言です。イエシュアはお一人ではなく、天の軍勢とともに再臨されます。弟子たちとともにベタニヤに向かわれるイエシュアの姿とこれらの描写の中に再臨のイエシュアの「型」が表されていると思われます。ただ、この時の弟子たちはそれを全く理解していないようでしたが。

11:17 それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。

「四日」、これも一日は千年という解釈で捉えるならば四千年です。「イエシュアがおいでになる」、これが再臨を意味する言葉だと考えるなら、イエシュアが再臨されるまでに四千年かかる、ということになります。ではいつから数えて四千年なのかというと、先ほどラザロはイスラエルの民、ユダヤ人を表していると述べましたが、彼らの祖であるアブラハムは B.C2000 年ごろの人物だと言われています。このアブラハムに神様の契約、計画が示されましたが、彼はそれを見ることなく死んで「墓の中に入れられ」ました。そこから数えて四千年と考えるならば、先ほどの「二日」の持つ意味と話がつながります。つまり B.C2000 年、A.D2000 年、合わせて「四千年」です。神様は非常に数字に正確なお方です。数にこだわりを持っておられます。御国を建てるという神様のご計画とは、神様が気まぐれに思いついて適当にやっているものではなく、天地創造の前から緻密に計算され、ご自分の御子のいのちを代償にしてでも果たそうとしておられる、神様の全精力と情熱の結晶だからです。ノアの箱舟、幕屋、神殿とその祭具の寸法、ささげ物の数量などはその顕著な例で、その材質、そして数へのこだわりは尋常ではないものがあります。ですから二日、四日などの時についてもそれが言えます。つまり神様は時間という数においても非常に正確だと言うことです。遅れることは決してありません。

11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。

11:19 大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。

マルタもマリヤもユダヤ人ですが、今はこの二人を異邦人の教会、クリスチャンとして捉えていますので、このユダヤ人たちは今日メシアニック・ジューと呼ばれる、イエシュアを信じるユダヤ人を指していると考えられます。現在はまだまだ少数派の彼らですが、その数は年々着実に増えていっています。後に「大ぜい」になることがここに示されていると考えられます。

8. 空中再臨

11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家でずわっていた。

11:21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

11:22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」

11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

11:24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生き

るのです。

11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

11:27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」

ここはイエシュアとマルタが「終わりの日のよみがえり」について語り合っているところです。死んだ人間が生き返るだけでなく「決して死ぬことがない」ことが語られているのです。そしてそれが「世に来られる神の子キリスト」すなわちメシアを信じることであるということが語られています。これはイエシュアの再臨を指し示す内容そのものです。

そしてここに記されているイエシュア、マルタ、マリヤとユダヤ人たちのそれぞれの動きについて考えてみたいと思います。まずイエシュアがまだ村に入る前に、最初に動いたのはマルタです。「聞いて迎えに行った」と記されています。一方マリヤは「家ですわって」いました。イエシュアを信じる異邦人の教会、クリスチャンを指し示す存在としてマルタとマリヤがたとえられていると述べました。しかしここに同じ存在を示しているはずの二人に、微妙な違いが生じています。

11:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。

11:29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。

しかし結果的にはマリヤも「すぐ立ち上がって」マルタに続いてイエシュアのところに行っています。まず最初にマルタ、そして続いてすぐマリヤ、一体これは何を意味するのでしょうか。テサロニケ I 4:16~17 にこのような預言が記されています。

テサロニケ I

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

これはイエシュアの「空中再臨、空中携拳」を示す箇所です。時系列的にはイエシュアがエルサレムに帰って来られる「地上再臨」の前に起こることとして私は考えています。そう解釈するならば、このマルタは、まず初めによみがえる「キリストにある死者」、イエシュアを信じてすでにその寿命を全うした教会、クリスチャンたちを指し示していると考えられ、そして次にマリヤは、この空中再臨が起こる時点で「生き残っている」教会、クリスチャンたちを表していると考えられます。11:20 で「マリヤは家ですわっていた」とありますがここで「すわっていた」と訳されているヘブル語、ヤーシャヴ(יָשָׁב)は「住む、暮らす」という意味を持ち、本来この「地上で生きること」を意味する言葉であることも理由の一つと考えられます。

11:30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。

これらの出来事がイエシュアが村に入らないで、道の途中で起こっていることも、これが地上再臨ではなく、地上にたどり着く「途中」、すなわち空中再臨であることを示すものと考えられます。また 11:29 のマリヤが

「すぐ立ち上がって」という表現も、テサロニケ I 4:17 の「たちまち…一挙に引き上げられ」と重なります。ヘブル語では「立ち上がる」も「引き上げられる」も同じクーム(קום)という言葉であることも大きな理由として挙げられます。

11:31 マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女について行った。

先ほど述べたメシアニック・ジューと呼ばれるイエシュアを信じるユダヤ人たちも、この出来事の中に含まれるのですが、やはり神様にとってイスラエル、ユダヤ人とは特別な存在なのです。ですからこのように、一緒にありながら別の存在として記されているのだと考えられます。

11:32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかる、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

ここにも大きな真理が示されています。つまり「イエシュアがおられるなら死ぬことはない」ということです。「このようにして、私たちはいつまでも主とともにいることとなります」ということが成就するのです。

9. 地上再臨

そしてここからはイエシュアの「地上再臨」についてのしるしが表されていると考えられます。先に述べたように、死んだラザロは、滅びたイスラエルを指し示していると捉えています。

11:33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、

11:34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」

イエシュアの地上再臨が起こる鍵となる言葉がここに示されています。ユダヤ人たちの「主よ。来て…ください」という言葉です。

ルカ

13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることができません。」

「あなたがたの家」イスラエルが荒れ果てたままに残される。それが再び建て上げられる時とは、ユダヤ人たちがイエシュアをメシアと認め、祝福し、「来てください」と言う時であることが解ります。

10. 涙

11:35 イエスは涙を流された。

11:36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」

11:37 しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う

者もいた。

イエシュアはなぜ涙を流されたのでしょうか。これをヘブル的に解釈するためにこの「涙を流す、泣く」ことを意味するバーハー(נָדַד)について考えてみたいと思います。バーハーが聖書で最初に使われる出来事が創世記 21:16 です。

創世記

21:16 自分は、矢の届くほど離れた向こうに行ってすわった。それは彼女が「私は子どもの死ぬのを見たくない」と思ったからである。それで、離れてすわったのである。そうして彼女は声をあげて泣いた。

これは、アブラハムの家を出され、荒野をさまよった女奴隷のハガルが、一緒にいた自分の子の死を感じ、離れて泣くという場面ですが、ここに表されているのはアブラハムの家すなわちイスラエルに対する神様の約束、ご計画から離れる者を思って「流される涙」であると考えられます。「主はどんなにラザロすなわちイスラエルを愛しておられるか」という事実を見つめる者と、それに目を留めずつばやく者、この両者は遠く離され、すなわち「分けられ」、神様のイスラエルに対する愛に目を留める者は神の国、御国へ、神様を信じず、返ってつばやく者は滅びへと「さばかれ」ることが、この涙の意味であると考えられます。

11. 憤り

11:38 そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。

イエシュアは 11:33 と 38 で二度「憤り」を覚えておられます。実はこの「憤り」と訳されている言葉もマルタとマリヤに示されたマル(מַר)です。マルは「私をも祝福してください」異邦人の御父に対する嘆願であると述べました。

創世記

27:34 エサウは父のことばを聞くと、大声で泣き叫び、ひどく痛み悲しんで父に言った。「私を、お父さん、私も祝福してください。」

27:38 エサウは父に言った。「お父さん。祝福は一つしかないのですか。お父さん。私を、私をも祝福してください。」エサウは声をあげて泣いた。

この嘆願は、「私だけを祝福してください」というものではなく、「私も」ですからヤコブとエサウの両方を、つまり「イスラエルと異邦人の両方を祝福してください」という思いのこめられたものと考えられます。それが「お父さん」御父である神様に対して、御子であるイエシュアからのマル「痛み悲しむ」ほどの激しい求め、願いが表されたものだと考えられます。そしてこの箇所にも先ほどの「涙を流す、泣く」を意味するバーハーが使われています。つまりマルとバーハーは、息子から父への怒りにも似た激しい嘆願を指し示し、それはイスラエルと異邦人がともに祝福されることを願ったものであると考えられます。

12. 石を取りのける

11:39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭く
なっております。四日になりますから。」

「四日」すなわちアブラハムに神様の計画が示されてから四千年の歳月が経とうとしています。しかしその
計画は一つも腐ることなく、欠けることなくすべて成就するのです。そしてその四日の後「石」が取りのけら
れます。

11:40 イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言った
ではありませんか。」

11:41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてく
ださったことを感謝いたします。

この「石を取りのける」という行為にもまた、大きな意味があると考えられます。なぜならエゼキエルの預言
にこう記されているからです。

エゼキエル

11:19 わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わた
しは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。

36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだ
から石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

イエシュアが地上再臨される時、イスラエルに新しい心、新しい霊が与えられることが約束されています。そ
れは同時に、かたくなな心、「石」の心を取り除くことをも意味していると考えられます。

14. エデンの回復

11:42 わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、
回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、
こう申したのです。」

11:43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」

ご自分は御父から遣わされた御子、御父の代理であること、語る言葉、なさる業、赴く場所、出会う人、時、
すべてが御父の御意志とご計画に基づくことをイエシュアはこのヨハネの福音書で何度も繰り返し語ってお
られます。そのことを語られたうえで、大声でラザロの名を呼ばれました。つまりこの声はイエシュアを通し
て発せられた御父の声、神様の声です。この「声」と訳されているヘブル語、コール(קול)は「声、音、雷」
を意味する言葉ですが、初めて使われたのが創世記 3:8 の出来事です。

創世記

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

3:9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

これは最初の人、アダムとそしてエバを呼ぶ神様の声です。罪を犯した人は、神様を避けて隠れました。ラザロの遺体は墓の中に「隠され」、イエシュアは 11:34 で「どこに置きましたか」と言われました。かつてアダムを呼ばれたように、神様はラザロ、すなわちイスラエルを呼ばれたと考えられます。つまり神様はエデンの園における神様と人との関係を、イスラエルによってもう一度初めからやり直すことを示そうとしておられるのだと考えられます。

11:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

ラザロが布で「巻かれていた、包まれていた」こともエデンでの出来事との関連性が考えられます。なぜなら同じく創世記にこのように記されているからです

創世記

3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

人は罪を犯すことによって、神様との関係に「おおいを作り」、自らを隠し、神様から離れる者となりました。しかし神様はイエシュアを通して、そのおおいを「ほどいてやって、帰らせる」つまりその関係、交わりを回復させることがここに示されていると考えられます。

このように、イエシュアを通してなされる神様のご計画、イスラエルの回復、再興とは、創世記に記された神様とアダム、人との関係、交わりの回復すなわち「エデンの回復」であると言えます。そのような視点で聖書を読むならば、イエシュアの言われた一つひとつの言葉、なされた行動の、そのすべてに意味があることが解ります。